Osaka University Knowledge Archive

Title	イランの口承文芸 -現地調査と研究
Author(s)	竹原, 新
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58745
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

氏　　名	竹　原　　新
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲第　5　号
学位授与年月日	平成１２年３月２７日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当　課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	イランの口承文芸－現地調査と研究－
論文審査委員	主　査　教　授　岡　崎　正　孝
	副　査　教　授　森　　茂　男
	副　査　教　授　宮　本　正　興
	副　査　教　授　高　階　美　行
	副　査　助教授　藤　元　優　子

論文の内容要旨

本稿は、筆者がイラン・イスラム共和国において実施した口承文芸調査の記録とその分析及び考察である。口承文芸を文化研究の題材として扱うためには、相当量の一次資料を蒐集し、整理と分析をする必要があることは言うまでもない。これまでの研究によって、イランにおいて民話については存在し、伝承文化として浸透してきことが確認されている。しかし、最後に本格的な調査が行われたのは二十年以上前のことである。そこで、当研究分野では、基礎的研究としてイランで資料の蒐集及び整理を行い、当地域の口承文芸の現状を正確に把握することが望まれていた。

本調査の目的は、イランにおいて口承によって伝承される文化の現状を包括的に把握することにある。また、イランの口承文芸資料を増やすだけでなく、伝承者であるイランの民衆の民俗の理解を通して、当地域の口承文芸の全体像を明らかにするように心がけた。これまでのイランの口承文芸研究は、著しく民話に偏っていたが、本研究においては、伝説、歌謡を含む口承文芸全般を扱った。さらに、関連する民俗資料として、伝承遊戯と民間信仰も調査対象とした。

ところで、歴史的には幾度も大帝国を建設し、地理的にはシルクロードに沿うイランの口承文芸の研究は、他の領域の文化研究においても重要な意味を持つ。ところが、近代的な方法による調査に基づくイランの口承文芸の一次資料は非常に少ないと言える。このような状況の中、２００例余のイランの口承文芸を翻字して一次資料を作るということは、意義のあることである。

イラン人の伝統的な考え方は、これまで主に文字化された文献資料によってしか理解する方法がなかった。ところが、これらの文献資料は、必然的に高度な教育を受けた者によって書かれたものであり、決して大多数の民衆をも含めたイラン人全体の考え方を代表したものではない。口承によって代々伝わる民話、伝説、民間信仰などには、時代に流されない伝統的な考え方が含まれているので、文献資料を補うことができる。従って、口承文芸の研究は、口承文芸研究だけではなくて、イラン地域文化研究にも大きく貢献すると考える。

こういう経緯から、平成１０年７月より、８ヶ月間の日程でイラン・イスラム共和国内において、口承文芸を中心に聞き取り調査を行った。平成１１年３月１５日現在で、８１人の話者から合計２０２例の事例を蒐集した。

調査方法は、半永久的に音声が劣化しないＭＤで録音したものを翻字するという方法を採った。調査項目としては、題名、分類、録音箇所、収録時間、調査日、調査地を整理上の項目とした。また、名前、年齢、性別、職業、住所、出身地、伝承者を話者情報としてペルシア語および日本語で記入している。加えて全ての事例において写真による話者の肖像を添付した。翻字は、ペルシア文字による保存とこれをローマ字に直した保存の両方を行った。さらに、全ての資料に日本語による対訳を付した。方言や口語の言い回し自体も伝承文化であるので、翻字に際しては、言い間違えもそのままにして、話者の語ったままの発音を書き留めている。採集者の意図的な改竄は一切行っていない。現時点で考えられる質的量的に最高のレヴェルの資料であると考えている。また、過去に２００例程度の資料を一つの基準に従って集めた調査例はない。イランの口承文芸を包括的に把握するために、調査地を一地点に限定せず、国内の１７地点において幅広く行った。８ヶ月という調査期間をかけてイランの主立った地方を回り、２００の事例を集めたのは、初めての試みである。

調査の成果として、動物寓話（１０例）、本格昔話（３９例）、笑話と小話（３６例）、形式譚（３例）、伝説（４６例）、現代伝説（２４例）、歌謡（１３例）、伝承遊戯（３例）、民間信仰（２８例）の事例を合わせて２０２例集めることができた。この結果、イランでは、現代でも口承文芸が幅広く伝承されていることが実証された。特に、伝説や現代伝説に関しても、十分存在が推測されるにもかかわらず、これまで体系的な蒐集はなされていなかったが、本研究で、相当量の資料と共にその存在を確認した。本稿では、各分類項目については、解説においてそれぞれの問題点を論じた。

年齢と性別の分析から、若年層が口承文芸を知っていることがわかった。これにより、イランの口承文芸がまだ文化として生きており、継続していることが明らかになった。また、伝承経路の傾向の分析から、伝承は主に家庭内において行われていることが明らかになった。

民話についてはＡＴ方式による分類を試みたが、３分の２弱が分類できなかった。他地域との伝播関係を指摘しうる事例が中心として見られるというより、固有のイラン文化に起因する民話が一般的に語られていることが明らかになった。

以上のことから、イランにおける口承文芸の現状は、この研究によって概ね把握することができたと考える。

論文審査の結果の要旨

従来イランでの口承文芸の研究は文献資料が中心で，研究の中心となるべき現地調査から得られる一次資料の蒐集と広範囲な調査研究が主要な関心となっていなかった．こうした口承文芸学の真空地帯とでもいうべきイランで，竹原氏は平成10年7月から翌年3月にかけてイラン国内17箇所の地点で総数81名の話者から202話の民間説話を採録した．本論文はそのときに採録した口頭伝承（民話，伝説，歌謡，伝承遊戯，民間信仰など）を」ペルシア語文字とローマ文字に翻字し，日本語に訳したものである．さらに，採録された民話の基礎データ（採録地の地理的情報，話者の年齢・職業，性別，出身地，伝承者などの話者情報，方言に対する適切な語学上の注）などを付し，

口承文芸研究では一般的に行われているAT方式による整理を行っている．総じて，現代イランの口承文芸研究上の第一級の資料となっている．また，添付された豊富な原語資料はペルシア語方言の貴重な研究資料ともなっている．こうした作業が単独で，しかも短期間で行われたことは竹原氏のフィールド・ワーカーとしての資質と語学の運用能力が優れていることを示している．

氏の論文によって明らかにされた事柄を４点だけ列挙すると次のとおりである．①１７箇所に及ぶ調査地点では（テヘランやエスファハーンのような都市も含む）いまだに民間伝承が人々の生活の中に生き続けていることから，イランでは現代でも口承文芸が伝承されていると推測される．②インフォーマントの年齢が老人から若者までを含み，かつ口頭伝承が親から子へと語られている場合が多く，口頭伝承は地域のみならず，家庭の中でも継承されている．③ ＡＴ番号で整理できる民話は全体の３分の１にすぎない．つまり，イラン固有，または非ヨーロッパ起源と思われる民話が数多く伝承され，とくに「笑い話と小話」に集中している．④伝説は民話に対して話のトピックが歴史上または現代上の特定の人物や場所に限定されるが，従来の民話研究ではあまり重視されてこなかったこの種の分野は比較的豊富に伝承されている．

ただし，分析やレファレンス情報の提示に不十分なところもあり，論文の構成に対して疑問を提出する意見もあったが，本委員会全体としては，貴重な大量のデータを国内外の研究者が利用できる形で提示し，現代イランの口承文芸の全体像を解明する端緒を切り開いた点を高く評価した．

以上から竹原氏に博士号を授与することは妥当であるとの結論を得た．